

「天下」「天狗流星」に「閑」る

―中世の隕石落下とそのインパクト―

似鳥雄一

はじめに

宮城県名取市に「閑上」という土地がある。難読地名の一つだが「ユリアゲ」と読む。仙台平野を南北に分けた場合の仙南平野に位置し、名取川が太平洋に注ぎこむ河口付近の右岸を占める海辺の街である。日本一ともいわれる赤貝の名産地としてよく知られた漁港でもある。そして、二〇一一年三月一日の東北地方太平洋沖地震にともなう東日本大震災で甚大な津波被害の発生した土地である。

赤貝の水揚げはすでに同年末から再開されており、地域の商業拠点である朝市も二〇一三年五月に本格的に復活したとのことだが、もとより筆者は現地の復興状況について深く言及できるような立場にはいない。かわりに本稿ではその地名と文字についてとりあつかいたい。この「閑上」という地名にふれてまず気になるのは、何といても「閑」という文字のことである。この「閑上」という地名以外で目にすることはほとんどないはずであ

る。もともと宮城県内には「閑前」や「閑谷地」といった地名もあるもので「閑上」に限るわけではないが、いずれにしても現在ではこれらの地名のほかにはまず用いられることのない文字といつてよい。

そこで本稿ではこの「閑」の字について、中世における未紹介の用例を手掛かりに、そこで表現された事象の内容を明らかにし、「閑」の字の用法や「閑上」の地名との関係についても若干の考察を加えてみたい。

一・辞書類にみる「閑」の由来

まずは手始めに、諸橋轍次『大漢和辞典』から「閑」の字を引いてみる。すると「国字」すなわち日本で作られた漢字に分類されており、訓は「ゆる。ゆり。ゆれる」とある。その典拠として「観聞志」という史料の「按、閑字未_レ見_二字書_一、俗間用來、而取_二水波激蕩之状_一」という記事が挙げられている。つまり「閑」は字書にはみえないが俗に用いられてきた文字で、水波が激しく揺れ動くさまを表すのだという。そして「閑」の用例としては宮城県の地名として「閑上（ユリアゲ）」の語が示されているのみで、あわせて「封内風土記」にみえる「洵上浜、有_二市店_一而駅也、国俗作_二閑上_一」という記述が典拠として引かれている。つまりもとは「洵上」と記していたものが、国字をあてて通俗的に「閑上」と表記するようになったのだという。「洵」も同じく『大漢和辞典』で調べると、「洗う」、「よなく・水でゆり淀ませて善いものと悪いものを選びわけ」、「流れる・流す」、「さらう」といった意味があるとされる。なお「観聞志」、「封内風土記」はいずれも近世に仙台藩で編纂された地誌で、「観聞志」は正式には「奥羽観蹟聞老志」といい、編纂を命じた四代藩主伊達綱村が死去した翌月の享保四年（一七一九）七月に完成された。「封内風土記」は七代重村の時代に編纂され、安永元年（一七七二）

に完成をみたものである。

それでは次に、「閑上」なる地名にはどのような由来があるのか。平凡社『日本歴史地名大系』では「閑上浜」の項で次のように述べられている（抄出）。

文禄五年（一五九六）二月吉日の名取高柳之内北方よりあげ浜名寄帳（伊達家文書）が残り、かつては高柳に含まれていた。地名の由来は養老三年（七一九）海岸に十一面観音像がゆりあげられたので、ゆりあげ浜と称したという。「封内風土記」吉田村の項によれば、この仏像はその後吉田村の高館山に移されて羽黒権現として祀られ、のち熊野那智権現と号するようになったといわれる。同書に「淘上浜」、東禅寺にある後藤富藏遺徳碑文に「淘揚浜」とある。「観蹟聞老志」には「閑上村」として「按閑字不見字書俗間用來」とある。

すなわち「ユリアゲ」の地名は観音像が浜に「ゆりあげられた」ことに由来するのだという。また一次史料における初見は文禄五年であるが、そのときの名寄帳を確認してみても「ゆりあげ浜」にどのような漢字をあてていたかはわからない。⁽²⁾さらにこの記事の続きをみてみよう。

「閑」の字について、元禄一〇年（二六九七）四代藩主伊達綱村が落成した長町大年寺（現仙台市）に参詣、山門内から東方の浜を見て浜の名をたずね、門の内から水が見えたので今後門の中に水を書くようにといったと伝える。また当村鎮座の湊神社は、承応年間（一六五二―五五）まで水門四社大明神と称したが、この浜にたびたび火災があったので水門明神の神託を受け、神名の水門を「閑」として地名としたともいわれる（閑上風土記）。

このように「ユリアゲ」の地を遠くから眺めた伊達綱村によって「閑」の字が発案された、とする逸話は巷間

よく知られたものである。しかしこの逸話をそのまま信ずるには大きな問題がある。それは、綱村が死去した時点でもまだ編纂作業が続いていた「奥羽観蹟聞老志」をみても、「閑」の字については先述のような説明があるだけで、この逸話は収録されていないという点である。そう考えるとこの逸話そのものに関しては後世の創作という可能性が高いが、一方で「閑」の字が近世以降に誕生したという可能性までは否定しきれない。

このほかに角川書店『角川日本地名大辞典』をみても、以上に引用した記述と基本的に同様であるが、「閑」の字については「従来の漢字にはなく仙台地方だけの文字である（宮城県地名考）」としている。

以上のように、これまで「閑」の字は近世以降の用例が知られているのみで、その由来を中世以前にまで引き上げうるような徴証は得られていなかったのである。

二．「閑」の用例と「天狗流星」

そこで次の史料をみてもらいたい。中世における「閑」の字の用例として新たに見出されたものである。

【史料一】「政覚大僧正記」延徳四年（一四九二）二月四日条

四日 乙巳 雨下

一、京都御祈禱事、御教書到来、則如_レ例触_レ之、正月十九日未下_レ剋、於_二京都_一閑_レ之、南都も方々鳴云々、

就_二天鳴動事_一、為_二公武_一御祈事、自_二来月_一

（筈）
月五日_一至_二同十三日_一、殊可_レ抽_二精誠_一之旨、可_レ有_二御_一下_一知

寺門并七大寺^一之由、被^二仰下^一候也、誠恐謹言、

正月廿八日

(勸修寺)
教秀

興福寺別当僧正御房

「政覺大僧正記」は関白二条持通の息子で奈良興福寺の長官にあたる別当になった政覺という人物の日記である。同日記は現在「史料纂集」として延徳元年の分までが刊行されているが、今回掲げたのは未刊行分にあたり、国立公文書館が所蔵する原本を撮影した写真本をもとに、筆者が翻刻したものである。以下に写真を掲げておく。



問題となる文字は一つ書本文の二行目に記されており、「門」（もんがまえ）の中に草書体の「水」という字がやや崩した形で書かれているものと読み取れる。本稿で述べていくように前後との文脈から考えても、「閑」と読むのが妥当と考える。

記事の内容はというと、正月一九日に「於京都閑之」という変異が起り、奈良でも「方々鳴」という事態が発生したとのことで、興福寺（寺門）ほか南都七大寺に対して祈祷を行うように命ずる京都からの御教書が別当である政覚のもとに届いた。政覚が日記中に引用した御教書の差出は南都伝奏の勧修寺教秀で、本文ではその変異のことを「天鳴動」と称している。ここで問題となるのは本記事の内容、特に「於京都閑之」というのが具体的にどのような事象を指しているのかということである。

この点について理解を深めるため、以下では同時期の他の日記との照合を行ってみよう。まずは興福寺別当として政覚の先任者にあたる尋尊の記録を『大乘院寺社雜事記』から確認するのが先決である。

【史料二】『大乘院寺社雜事記』（増補続史料大成）延徳四年正月二〇日条



「閑」拡大図



参考：「水」の草書体
（『実隆公記』文明六年
八月一七日条）⁽³⁾

廿日、朝雨下、

(中略)

一、昨日十九日八時分、一天下動了、如^(雷)電音^一也、
変異の翌日に尋尊が記したところによると、「一天下」というような広域にわたって鳴動が起こり、雷のよう
な音が聞こえたという。

【史料三】『大乘院寺社雜事記』延徳四年二月四日条

四日、雨下、

(中略)

一、廿八日伝奏奉書到来、去月十九日天動事、公武御祈自^二五日^一可^二沙汰^一云々、寺門并七犬寺相触^(了)□、自^二
袖留木方^一進^レ之、

尋尊は関白一条兼良の息子なので政覚とは生まれた家が異なり、ときにお互いが別々のルートで京都からの情
報を入手することがある。しかしこの場合は政覚が引用した勧修寺教秀の御教書を尋尊も披見したか、あるいは
同内容の奉書を受け取った上で記事を書いていることは史料三をみても明らかである。尋尊はこの変異を「天
動」と表現しており、やはり上空で何かが起こったものらしい。

次に、この変異を京都で体験したのが、菅原氏の一族でこのとき文章博士であつた東坊城和長である。彼の日
記である「和長卿記」には当日の記事として次のようにある。

【史料四】「和長卿記」延徳四年正月一九日条⁽⁴⁾

十九日^{卯辛}、雨下、今日外様申沙汰也、松拍子如^レ例、参仕衆、日野一品以下如^二例年^一、不^レ能^レ記^レ之、御宴之

一天下「天狗流星」に「関」る

最中、申刻計、天地大鳴動、以外変異也、後聞、諸国同前云々、

当時、公家衆は内々小番と外様小番とに分かれて編成されていたが、そのうち和長も含めて外様に属する人々がこの日に正月の宴会を開いていた。その最中に「天地大鳴動」というとんでもない変異が起こったと和長は記している。さらに後に聞いたところでは、諸国でも同様であったという。

山科家の家司を務めていた大沢久守も、和長と同じようにこの日の変異を自らの体験にもとづいて語った一人である。大沢氏の日記として知られる『山科家礼記』は、その大部分が久守によって記されたものである。

【史料五】『山科家礼記』（史料纂集）延徳四年正月一九日条

十九日、自^レ夜雨降、^{辛卯}、

一、禁裏外様御番衆さるかく申沙汰、

（中略）

一、^金□日八時、ソラタカク、ナルカミニテモナシ、何共心へス候也、

久守も上空高いところから大きな音がするのを耳にしたらしい。しかし雷というわけでもなく、音の正体が何なのかはよくわからないと述べている。

人づてに聞いた話ではあるが当日のうちに情報を入手したのが、このとき蔭涼職の地位にあった亀泉集証である。相国寺鹿苑院に設置された蔭涼軒なる居室の留守僧は蔭涼職と呼ばれ、將軍の側近として禅僧人事などを掌握して大きな力を持つようになった。建物としての蔭涼軒は応仁の乱で焼失してしまったが、職名としてはその後も生き続けた。歴代蔭涼職の日記が『蔭涼軒日録』である。

【史料六】『蔭涼軒日録』（増補統史料大成）延徳四年正月一九日条

十九日、不参、天陰小雨、依^レ虫氣^二不^レ喫^レ粥、修懺、半斎々会、皆懈怠、入^レ夜初赤粥些子喫^レ之、(中略)

晡時天降雨、天狗流星一震、人皆驚、予不^レ知^レ之、聽^二人之語^一耳、

この日の亀泉は腹痛で粥も食べられず、法会の類もつとめられなかったというから寝込んでいたのであろう。そのため彼自身は知らなかったが、目撃者の話によれば鳴動の正体は「天狗流星」だったというのである。

以上の情報を総合してみよう。上空高くから雷にも似た轟音を発し、未の下刻から申の刻という太陽がまだ沈まない時間帯に、しかも降雨にもかかわらず人々に視認され、「一天下」や「諸国」などという広い範囲に渡って鳴動をもたらした「天狗流星」。もはやこうなると、単に夜空に光って消えるだけの現代でいう流れ星などといった程度のものとは明らかに違う。

ここで我々は、ごく最近世界的にも大きなニュースとなった一つの天文現象を想起せずにはいられない。すなわち二〇一三年二月にロシア南部のチェリャビンスク州に落下した隕石のことである。秒速十数キロという猛烈なスピードで飛来した隕石は、前方の大気を押しつぶしながら進むことで断熱圧縮という現象により急激に高温に達し、分裂した瞬間に放った閃光は太陽の明るさを超えていた。光だけでなく、物体が大気中を超音速で通過すると衝撃波が発生する。このときの強烈な衝撃波によって建物の損壊があったほか、窓ガラスが大量に破壊され、一〇〇〇人を超える負傷者が出た。^⑤

つまり延徳四年正月に日本の上空に現れた「天狗流星」も、規模の大小はあるにせよ、このロシアの事例と類似した隕石の落下と考えれば説明がつく。もちろん中世日本の建物にガラス窓があるわけはなく、ロシアの隕石のような物理的被害は記録をみる限りでは報告されていない。しかし当時の人々に、災いの前触れではないかとの心理的動揺を与えるには十分であった。

【史料七】『御湯殿上日記』（「続群書類従補遺三」）延徳四年正月二二日条

廿二日、（中略）十九日にいぬゐるのはう、めいとうせし事、せんもんまいる、おとろきおほしめす、（後略）

天皇に近侍する宮中女官によって代々書き継がれた当番日記が『御湯殿上日記』である。この度の鳴動の吉凶について陰陽寮から占文が提出され、後土御門天皇はその内容に驚きを示したという。

【史料八】『後法興院記』（「増補続史料大成」）延徳四年二月二日～三日条

二日卯、晴、風吹、去月有^二天鳴動事^一、依^レ是御祈事、被^レ仰^二出諸門跡^一云々、天子并將軍慎兵革云々、（中略）

三日辰、晴、（中略）天鳴動占文、尋問記^レ之、

今月十九日未時、從^レ乾、天鳴^{声如雷}、

天文決要齊類云、天鳴 天子慎^レ之、

乙巳占云、天鳴有^レ声 大將軍慎^レ之、

天鏡經云、天鳴兵大起万民勞也、

晋書天文志云、帝元大興二年八月戊戌、天鳴東南有^レ声、占云、天鳴人主有^レ慎、三年十月壬辰天又鳴、其年兵起、

延徳四年正月廿二日

從二位有宣^{（土御門）}

この年までに関白・太政大臣を歴任している近衛政家の日記『後法興院記』に、陰陽家で安倍氏の一族である土御門有宣が天皇に提出した占文の本文が記録されている。それによれば天皇と將軍には謹慎が必要であり、兵乱が起こる兆しであるとのことであつた。

このように卜占の結果は朝廷・幕府の双方に関わるものであつたので、「公武御祈」を門跡諸寺院に命ずると

いう対応がとられたことは、すでにみた通りである。そのほかにも三月二〇日には祈禱のために清涼殿で護摩法が行われたことが、東坊城和長と同じく菅原氏の一族でのちに文章博士になる五条為学の日記『拾芥記』（改訂史籍集覧）同日条にみえる。

実はこの延徳四年＝一四九二年という年は、地表に落下した隕石の実物が現存し、かつそれを裏付ける確かな目撃記録も残っている世界最古の年で、ドイツとの国境に近いフランスのエンシスハイムという町に隕石が落下している。⁽⁶⁾それは一月のことなので日本の「天狗流星」とは直接の関係はないのであろうが、隕石の落下という事象は中世においても世界各地で、ある程度の頻度で起こっていたと考えることができる。

以上のように、延徳四年正月に発生した鳴動は隕石の落下によるものと結論付けられたわけだが、実はこの延徳四年からさほど時を隔てない寛正六年（一四六五）にも、「天狗流星」と表現される事象が史料上に現れている。延徳の当時にも、寛正の変異の記憶を呼び覚まされた者が少なからずいたはずである。そこで次章では、寛正六年の「天狗流星」を素材に、隕石の落下が当時の人々に与えた心理的なインパクトをさらに探ってみよう。

三、「天狗流星」と応仁の乱

寛正六年（一四六五）九月一日の夜。九月十三夜といえは八月十五夜に次ぐ明月観賞の夜である。天気にも恵まれ、多くの人が空を見上げていたに違いない。そんななか人々の目に飛び込んできたのが「大流星」の飛来であった。そのときの具体的な様子は、室町幕府政所執事伊勢氏の被官で政所代をつとめた蜷川親元の日記からうかがうことができる。

【史料九】『親元日記』（『統史料大成』）寛正六年九月一三日～一四日条

十三日、戊午、天晴、例日、

（中略）

今夜大流星、

十四日、己未、天晴、月触子時、

出仕如_レ常、

昨夜_多時、流星勘文<sub>從二位在貞
正三位在盛</sub>大概勘_三写之、

大流星從_三西南_一竟_三東北_一、其大七八尺、其色赤、声如_三風雷_一、虚空暫鳴動、滅後為_三白雲_一、

或曰、飢荒、民人疾疫群死、或兵火起、人民流散、或流血積骨、或兵馬尽鳴、以為不祥、

以上一通也、（後略）

一三日夜に出現した「大流星」について、安倍氏と並ぶ陰陽家の賀茂在貞・在盛親子が翌日に勘文を提出した。それを親元が筆写したところによると、「大流星」は西南の空から東北に消え、大きさは七～八尺で色は赤、雷のような音響を發し、消えた後には白雲が残ったという。先述のロシアの隕石が落下した後にも、飛行した軌跡に沿って同じく白雲が觀察されたことは周知の通りである。

続いて『蔭涼軒日録』をみると次のような記事がある。

【史料一〇】『蔭涼軒日録』寛正六年九月一四日条

十四日、夜前四鼓之後、自_三西南角_一、大流星飛_三入東北角_一、其光芒射_レ人、其鳴如_三大地震_一、人皆聞_レ之驚倒也、在季・在貞占_レ之、曰、兵乱病事、五穀不收、人民死亡、貴人慎云々、記_レ之献_レ之、殿中上下、皆談_三論之_一、

諸門跡并宗門諸五山御祈禱之事被_レ仰出_一、即命_レ之、(後略)

この時期の記主は季瓊真纂であるが、彼によれば「大流星」は人を射るような光の筋と、大地震のような鳴動を發し、人々をひどく驚かせたという。これらの現象からすると、やはりこの「大流星」も隕石の落下と考えて差し支えなからう。そしてこのときも占いの結果、諸寺院に祈禱命令が發せられたのであった。

またこのときの「大流星」が人々にとつて尋常でなかったのは、なんと翌文正元年(一四六六)の同日にも再び現れたことである。『後法興院記』には次のようにある。

【史料一一】『後法興院記』文正元年九月一七日条

十七日_{丙戌}、陰、申刻許微雨洒、

(中略)

伝聞、去十三日夜子刻終、如_二去年_一有_二流星_一云々、但無_二動搖_一、自_レ良入_レ坤云々、月日時刻不_レ違_二去年_一、太以希代也、(後略)

もちろん現代の科学を知識として持っている我々は、この現象を偶然と片付けることができる。しかし中世の人々が、去年の同日と正反対の方角から現れて消えた流星に対して、ますます得体の知れない不安を感じたであろうことは想像がつく。

次いで『大乘院寺社雜事記』をみると、寛正六年九月一四日条に「夜前光物飛動」という短い記事があるのみである。しかし尋尊が大乘院に伝わる日記をもとに編纂した『大乘院日記目録』には次のように記されている。

【史料一二】『大乘院日記目録』(増補続史料大成) 寛正六年九月二三日条

十三日、夜、天狗流星、一天下振動、日本開白以來始歟云々、何事可_二出来_一哉、

一天下「天狗流星」に「関」る

尋尊によればこのときの隕石も「天下」を振動させるもので、「天狗流星」と表現すべきものであった。尋尊は「日本が開けてから初めてのことではないかという。いったい何事が起ころうとしているのか」などと不安を記している。ただし『大乘院日記目録』は後日の編纂史料とみられるため、寛正六年の当時からこの隕石のことを「天狗流星」と呼んでいたかは定かではない。

そして、この寛正六年の隕石を尋尊が「天狗流星」と表現したのがさらにもう一箇所ある。『大乘院日記目録』のうち史料一二も含まれる第二冊は、寛正六年の記事まで日次記形式で書き進めたのち、つづく文正元年から文明一七年（一四八五）までは大きな出来事や概況のみを書き記している。次に引用するのはその部分である。

【史料二三】『大乘院日記目録』第二冊

文正元年戊、二月廿八日、改元之、当上御在位三年也、十二月大嘗会、

応仁元年、天下大乱、当上・院兩帝、室町殿行幸、

文明二年、院崩給、

同八年、室町殿悉以炎上、行幸北小路尼亭、

同十一年、皇居尼亭炎上、行幸日野亭一条室町、又遷幸土御門殿、

同十三年、室町殿御隠居長谷、後号東山殿、至同十七年、云京都云諸国、無正体之間、山・南都等

之訴訟等、每事略之、然則、寺社領本末寺悉以無正体、越前国河口・坪江両庄ハ、朝倉或甲斐方以別

段敬神儀、半分致其沙汰通也、其□□庄以下、一切無之、

併天狗流星之所為、無力次第也、当大乱日本初例也、流星是又日本初也、

ここで尋尊が記しているのは、要するに応仁の乱による京都衰微・寺領退転の様子である。そのなかで特に問

題となるのは末尾の文章である。いわく「何もかも『天狗流星』のしわざであり、力の及ばぬことだ。このような大乱は日本でも初めてのこととて、流星もまた日本初のことである」と。すなわち尋尊は応仁の乱の原因を、その二年前に飛来した未曾有の「天狗流星」に求めているのである。

このような寛正六年九月二三日夜に現れた流星を応仁の乱の前兆とする見方は、応仁の乱をあつかった軍記物のなかにもみられるものである。⁷例えば文明三十四年（一四七一―七二）の成立とされる『応仁略記』⁸をみると、「天狗流星」という直接的な表現はないものの、流星が現れたのを凶兆とみた愛宕山の天狗が、比叡山・比良山の天狗を招き寄せて天下を乱そうと談合する様が描かれている。

また『応仁記』諸本のなかで最も古く、大永三年（一五二三）以後に成立したとされる一巻本『応仁記』⁹では、「天狗流星之事」と題する章を立て、尋尊と同じように「天狗流星」を明らかに応仁の乱の前兆として位置付けている。これより後に成立した『応仁別記』¹⁰や、流布本である三巻本『応仁記』¹¹でも、応仁の乱との因果関係の論じ方にはそれぞれ強弱があるものの、寛正六年九月二三日夜の「天狗流星」を応仁の乱へと至る道筋の中で描写していることにはかわりはない。

なお尋尊が死去したのは、一巻本『応仁記』の成立より早い永正五年（一五〇八）のことである。そして先述の通り、延徳四年（一四九二）の隕石に対しては間違いなく「天狗流星」という言葉が用いられていたのである。

以上のことから、次のような経緯を想定できる。すなわち寛正六年の隕石を天狗と結びつけ、応仁の乱の前兆だったとみなす言説は、おそらく文明九年に応仁の乱が終結する以前から巷間に広まっていた。それから延徳四年までの間に「天狗流星」という言葉が一般に定着していった。このような状況を前提として、応仁の乱を「天

「狗流星之所為」とする尋尊の『大乘院日記目錄』の記述が成立した、と。『応仁記』の「天狗流星之事」の記述が『太平記』に依拠したもので、政道批判の色彩を帯びたのも『太平記』の影響によるものとの指摘があるが、⁽¹²⁾「天狗流星」という言葉は決して『応仁記』が創作した単なる文学上のレトリックではない。隕石の落下が当時の人々にもたらした心理的動揺が、その二年後に勃発した応仁の乱によって思い起こされ、その結果として醸成された現実の社会不安に根ざした言葉だったのである。

なお本稿の直接のテーマからは外れるため詳しく言及することは避けるが、「天狗」そのものの歴史に関する研究にも重厚な蓄積があり、すでにそのなかで「流星」との原初的な関係性が指摘されてきた。⁽¹³⁾すなわち、もともと古代中国では流星・隕石のことを「天狗」と呼び、戦乱の予兆とみていたのだという。つまり「天狗」は「流星」に由来するのである。やがて「天狗」は七世紀までに日本にも伝えられたが、その後は中国とは全く異なる独自のアレンジが加えられていき、狐、猛禽、半鳥半人、そして「鼻が高く赤ら顔で山伏姿」という現代にも通ずるイメージが江戸時代には定着したという。だがその一方で、中世になると流星・隕石という天文現象と「天狗」との直接的な結びつきは忘れられたかのように理解されてきたのである。

しかし本稿で確認したように、一五〜一六世紀に至っても人々の間には「流星」の飛来から「天狗」を連想する意識が存在していたのである。ただしこのような意識が古代から連綿と普遍性をもって残存したものなのか、あるいは一部の人々、例えば中国とのつながりを持つ禅僧の周辺などから再輸入されたものなのか、その辺りの経緯については改めて検討する必要があるが、その点は後考に委ねたい。

四、「閑」の字と「閑上」の地名

さて、ここまでは二つの隕石の落下とそれらが「天狗流星」と呼ばれるに至った経緯をたどってきた。ここであらためて史料一にもどり、「閑」の字の用法について確定することにしよう。まず前提として、記主の政覚は撰閑家出身の興福寺別当であり、当時でも最上の知識階級に属することはいうまでもなく、何の裏付けもない突飛な漢字の用い方はしないだろうということを念頭に置いて考える。史料一の記事の内容からして、「於京都閑之」が鳴動に関する表現であることは間違いない。そして「南都も方々鳴」との並列・対比表現からみて、「閑」の字は「鳴動」のうちの「動」に相当する意味、すなわち「揺れ動く・揺り動かす」の意味で用いられていると考えられる。読み方について確定するのは難しいが、やはり後世の用法から考えて、「ゆり・ゆる」と訓読されていたとみるのが自然ではないか。

それでは、なぜ「閑」の字の用例はかくも少ないのか。隕石の落下だけでなく、そのほかの自然現象に用いられてもよさそうなものである。例えば、古代中世地震史料研究会（代表…石橋克彦）が公開している『「古代・中世」地震・噴火史料データベース』¹⁴では、地震・噴火・鳴動・その他の四種類に分類される約三〇〇〇件の事象が登録されているが、「閑」の字で検索をかけても一件もヒットしない（二〇一三年九月三〇日検索）。同データベースで地震の記事をみていくと、地震の描写に用いられるのは「震」「振」「動」といった字であり、まれに「揺」の字も使われるという状況である。一方、女性が記している『御湯殿上日記』では仮名表記で「ちしん（地震）ゆる」といった文言が頻出するが、「ゆる」の語にどの漢字をあてるべきかは判然としない。やはり基本

的には、振動を表現したいときには「動」の字を用いれば事足りたということであろう。その代替候補の一つとして、「閑」の字がごくまれに用いられたものと推測される。

そのような文字をこのとき政覚が用いたのは果たしてなぜであろうか。史料一の該当部分は伝聞形式なので、政覚自身が選んで用いた文字だとは限らない。しかし延徳四年の「天狗流星」の飛来は、応仁の乱の前兆といわれた寛正六年の先例を人々に思い起こさせたはずであり、尋尊をはじめとして政覚の周辺にも大きなインパクトを与えたであろう。その大きさを物語るのが、この「閑」という稀有⁽¹⁵⁾字であったと考えておきたい。

そして最後に「閑上」という地名に関してであるが、伊達綱村が「閑」の字を創作したという逸話が事実でありえないことは、本稿によって明らかになった。「閑」の字は中世から存在していたのである。そもそもこの逸話は綱村の代に編纂された地誌に収録されていない点、不審があることは先述の通りである。ただし「ユリアゲ」に「閑上」という漢字をあてたのは、近世以降のことかもしれない。

おわりに

本稿では中世における「閑」の字の、現在知ることのできる唯一の用例を糸口に論を進めてきた。明らかにできたことを簡単にまとめ直しておきたい。

まず「閑」の字は遅くとも一五世紀末にはすでに存在しており、「揺れ動く・揺り動かす」の意味で使用されることがあった。よって「閑上」という地名に関係して、伊達綱村が「閑」の字を創作したとする逸話は事実とみなすことはできない。

そして実際に「関」の字が用いられた事象というのは、隕石の落下であった。当時にあつては隕石は「天狗流星」と呼ばれ、二〇一三年のロシアの隕石のような物理的被害の有無は確認できないものの、応仁の乱の前兆とみなされるなど、当時の人々に大きな心理的動揺をもたらしたのであった。いわばこれは「流星」に由来するとされる「天狗」の原初的なあり方を継承するものであった。

いずれにしても「ユリアゲ」という地名を漢字表記するにあたって、このような稀字が選ばれた経緯については結局のところよくわからない。「ユリアゲ」のそもそもの由来も含めていまだ議論の余地はあるが、今後さらに「関」の字の用例が追加されることがあれば、そのあたりのことも明らかになる可能性があるだろう。

注

(1) この二つの地名はいずれも石巻市桃生町太田にあり、隣接して所在している。

(2) 『宮城県史三〇資料編七』。

(3) 本画像は東京大学史料編纂所『電子くずし字字典データベース』(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>)で検索したものを使用した。

(4) 刊本がないため、京都府立総合資料館が所蔵する写本をもとに翻刻した。閲覧に際しては『京都府立総合資料館所蔵貴重書データベース』(<http://www3library.pref.kyoto.jp/>)を利用した。

(5) 『日本経済新聞』二〇一三年二月一六日Web刊「ロシアの隕石、7000トン15メートル 半径100キロ被害」、NHK『クローズアップ現代』二〇一三年二月一八日放送「ロシア隕石落下の衝撃」などを参照。

(6) 鈴木敬信『改訂・増補天文学辞典』(地人書館、一九九一年)、島正子『隕石—宇宙からの贈りもの—』(東京化学同人、一九九八年)。

(7) 以下に掲げた軍記物については、松林靖明『室町軍記の研究』(和泉書院、一九九五年)、池田敬子『軍記と室町物語』(清文堂出版、二〇〇一年)、石田晴男『戦争の日本史九 応仁・文明の乱』(吉川弘文館、二〇〇八年)

を参照した。

- (8) 『群書類従二〇合戦部』所収。
- (9) 和田英道編『応仁記・応仁別記』（古典文庫三八一、一九七八年）、『早稲田大学古典籍総合データベース』（<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）所収。
- (10) 『群書類従二〇合戦部』所収、和田英道編『応仁記・応仁別記』（古典文庫三八一、一九七八年）。
- (11) 『群書類従二〇合戦部』所収。
- (12) 松林靖明『『応仁記』の天狗流星記事をめぐって―『太平記』の影響―』（『青須我波良』二六、一九八三年、のち前掲著書に所収）。
- (13) 以下、「天狗」の史的変遷については杉原たく哉『天狗はどこから来たか』（大修館書店、二〇〇七年）を参照した。
- (14) <http://sakuyaed.shizuoka.ac.jp/enice/>
- (15) 寛正六年の時点では政覚はまだ一三歳、二年前に出家得度したばかりであったが、尋尊はそのとき三六歳、すでに興福寺別当も経験していた。
- (16) この翌年、すなわち明応二年（一四九三）に明応の政変が勃発していることに關しては、「くしくも」とでもいうほかなからう。

Meteorite Fall in the Medieval Period and its Impact

NITADORI YUICHI

The character, “閑”, only appeared within the name of the place in Miyagi after the Early Modern Period. At first this paper introduced the newly discovered usage of “閑” in the Medieval Period. And it was revealed that the phenomenon expressed through the involvement of the character “閑” was the fall of the meteorite. The meteorite was called “Tengu Ryusei” in those days, although the physical damage was not confirmed, as we can see from the Russian meteorite in 2013, it was considered to be a foreboding of the Onin War, and it brought an enormous psychological unrest to the people of the time. Originally meteors or meteorites were called “Tengu” in ancient China, and “Tengu Ryusei” in Medieval Japan, so to speak, succeeded to the primitive way of “Tengu”.

From the above, it was pointed out that “閑” had already existed at the end of 15th century at the latest and, “閑” was used as the meaning of “to shake”. Thus, related to the geographical name “閑上” in Natori-shi, Miyagi, I came to the conclusion that the anecdote that Tsunamura Date created the character of “閑” is not a fact.